民会と決闘の野原
―古ノルド語 vangr と völlr および leikr の考察―

水野　知昭

キーワード：同族，集会，ゴジ，決闘，犠牲

1. 序：水辺に来訪する神

『ゲルマーニア』４０章に記されたネルトゥスは terra mater「大地の母」と規定されているものの、そのラテン語の神名 Nerthus が北欧の Njörðr と一致することについては従来よりほとんど異論がなかった。ひとしくこの女神を崇拝したゲルマーニア北縁の七族のうち、レウディーグニ、スアルドーネスおよびヌイトーネス（Nuitones を*Huitones の誤記とする説）の三部族について、それぞれ「赤」族（germ.*reuða-）、「黒」族 (germ.*Suartones)、「白」族（germ.*hwīta-）の意に解する見方がある（Schröder)。これら三種の色名がはたして女神にまつわる儀礼の役割り分担を意味するのか、あるいは「リーグの歌」に示唆されているように、奴隷（「黒い」種族)、農民（「赤」)、王侯（「白」）の三身分を表徴しているとみなすべきかについて（水野 1998a)、現段階では判断できない。しかし、「海上の島」から女神の依りましきたる聖車を載せて、祭司がユトランド半島のある一画をめざすからには、まぎれもなく「船」による来着を示唆している（水野 1996)。牛車に牽かれて女神が「来訪」するにふさわしき所はすべて「祭場」となり、この時、人々のあいだで pax et quies「平和と安息」が強く意識されるという。人々との交渉が終れば、祭司は女神を「神殿に送り返す」とされる。このように海のかなたから来往し、人里に平和と幸をまねき寄せるネルトゥスは、「平和と豊饒」を司る父子神ニョルズ・フレイの特性に合致している。過去の拙論において、折口信夫の用語を適用し、「北欧のマレビト」と命名した由縁である（水野 1996；1998b；2000b)。もうひとつ見逃せぬことは、七部族が共通して崇拝する神が海辺に参着するときを見定め、これを「平和」と大地豊饒の祭日として祝祭化することによって、多分に同族意識を昂揚させたということである。

2. OE.wang と ON.vangr

Go. waggs が Gr. paradeisos「楽園」の訳語に充当されていることはよく知られている（「コリント後書」12・4)。同系語の OE. wang が「水豊かな光輝く野」を意味し、古ゲルマンの「楽園」の基本概念を有していることについては既に詳論した（水野 1984)。一方 ON. vangr は、ソールとフレイヤのそれぞれの居住地 Þrúðvangar「力の野」と Fólkvangar「軍勢の野」の第２要素に用いられている。生と死の両義性をひめた-vangar が複数形であることに注目したい。ソールの「戦闘力の発現の地」としての野原は（水野 2002a, 58)、他方、女神フレイヤによって選ばれた戦死者の常住の地でもあった（Gylf 24)。

ノルウェー語 vang は、しばしば seter「(夏期の) 山間の酪農場」の周辺に広がる「放

牧地；夏期の牧野」を意味している（Haugen, 471)。たとえばVang（Hedmark 地方)、Vangen（Sogn 地方)、あるいは Evanger（Hordaland 地方)などの地名に用いられている。Leikanger（Møre og Romsdal 地方の Stadlandet 岬およびソグネ・フィヨルド）や Leikong（Gurski 島)は、ON. leikvangir「(家畜の遊ぶ）放牧地」（複数形)に由来している(Sandnes & Stemshaug, 202)。ノルウェーのこれらの - vang（r）地名は、海辺やフィヨルドの近辺、もしくは河川や湖水などの「水辺」から少し離れた所に位置しており、「水辺の放牧地」を基本義として確定できる。

ノルウェーの地名では、-heimr, -land, -ey, -vík, -hof, -hóll, -vin などがニョルズ名と結びつくことが指摘されているが(Elgqvist 1952, 57)、地名学者たちはとくに Tysnes 島（Hordaland 地方）の古名 Njarðarlög（または Njarðarlaug）に着目してきた。ただしその島名を、「ニョルズの法の裁き」(M. Olsen)、「ニョルズが司る平和（の地)」(J. Sahlgren)、あるいは「ニョルズの沐浴の地」(Elgqvist)のいずれに解するかで説が分かれている（Elgqvist 1952, 77-80)。このうち最後の解釈は、ネルトゥスの numen「神性」を「湖水にて洗い清める」という『ゲルマーニア』40 章の記録を想起させ、とくに興味深い。

E. エルグクヴィストの精緻な地名研究によれば、異教の神名*Ullinn が地名に用いられた例は比較的少数だが、ノルウェーでは ON. akr「耕地」、hof「異教の聖域」のほかに、ON. vangr「(牧)草地」と結びついた例がある。Ullensvang という地名（Hordaland 地方）は「教会敷地の周辺の野原」を表わしているが、*Ullinn という古き神名が第1要素となっていることから、より古くは「異教時代の民会の場」を指していたと解されている（Elgqvist 1955, 26)。ちなみに ON. all-vangr は almanna-vangr の短縮形で、「全員が集う野原」を意味していた(Cleasby & Vigfusson, 678)。

Óðinn と Óðr の対応と、*Ullin と Ullr の対応関係が相似していることから、地名にのみ表れる神名*Ullinn は、スキーに乗り弓矢を射る神ウッル（Ullr）と関連があるとみなされてきた。だが、ヤン・ドゥ・フリースはこの比例関係に疑念を呈し、オージンは古き神としてのオーズを信仰の上で駆逐したが、ウッルの方はウッリンの崇拝が衰退するまでは元来の地位にとどまり続けたと推定している（de Vries 1954)。もしこの仮説を是とするならば、書かれた神話の中でウッルの「特性」とされる一部は、本来ウッリンに帰属させられていたことになる。ちなみにウッルについて、次のように記されている。「かれは容貌が美しく、戦士としての事績を有している。決闘の際にはこの神に祈願するとよい」(Gylf 31)。神名*Ullinn が古時代の「集会の場」としての vangr と結びついたことを重視すれば、einvígi「一対一の決闘」を司るのは、元来ウッリンであったのではないか。というのは、近稿でも論述したように、vangr と同系の OE. wang は、その用例を検証してみると、勇者と敵手の「神聖なる決闘の野」を意味していたからである（水野 2001b; 2002a)。

ウッルは系譜上「シヴ（ソールの妻）の息子」で、雷神ソールの「継子」とされる(Gylf 31)。ソール神については、巨人フルングニルやゲイルロズとの「決闘」の話が伝えられている。ただし、ソール対フルングニルとの「決闘」は einvígi と呼ばれ、野外の「決闘の場」が hólm-stefna と表記されているのに対して（Skm 24)、ゲイルロズとの「対戦」は leikr の名で呼ばれ、後述するように、ゲイルロズの館の中で行

なわれており（Skm 26）、区別されていたようである。hólmr「決闘」は当然、hólm-ganga「川中島または小島へ決闘に出向くこと」を意味していた。ドゥ・フリースによれば、古代の戦争は、単に血なまぐさい争闘ではなかった。それは元来、特定の法に照らして、競合する双方の「言い分・主張」（ドイツ語 Sache 参照）に裁きを下すことであり、いずれの側に「正義」があるかは、勝敗の決定神テュールが裁きたまうと考えられていた。両軍相入り乱れての実戦となる前に、しばしば日時と場所を先決し、それぞれの側を代表する戦士による一対一の決闘が行われたのも、そのような神の裁きを占う意味があったからだ、という解説がなされている（de Vries 1957, II, 13-4）。したがってこの図式を借り受ければ、ソール対フルングニルの hólmr「決闘」は、それぞれアース神族と巨人族の「集団」を代表する両者が、水辺の地にて「正義」の神テュールの裁きを仰ぐところにその原義があったと言えよう（水野 1981a, 103-7）。

しかし、ソールの継子ウッルは決闘を司る神であるから、その加護を得て、対フルングニルとの決闘は最初から勝敗が決定されていたのように思える。また、ウッルが新参の神で、ソールの「継子」であるならば、ウッリンはその「実子」とみなされていた可能性がある。その推測はさておき、ソールの妻 Sif の名は、従来より解されてきたように、Go. sibja「親族関係」、OE. sibb「同族」などと同系である（de Vries, 473）。S. ファイストは語源不詳としながらも、これらの関連語彙として古代インドの sabhā「集会；集会をひらく広間；裁きの庭」、sábhyas「村の共同体の集会」をあげている（Feist, 417）。この語源解に基づけば、古来の社会慣行としての集会は、「同族」としての意識を再確認し、共同体構成員の結束をはかる機能を果たしたと言えるだろう。また Sif が決闘神ウッルの実母であるという系譜を重視すれば、「同族・親族」意識の昂揚が、一方では「決闘」を「法的に公認」する状況を生み出したと言えようか。この推定に立てば、「民会の野」としての vangr は、古時代の「裁きの庭」ひいては「決闘の野」の観念に帰着してゆくだろう。これらの問題についてはなお詳しい検討を要するが、先述した almanna-vangr（all-vangr）が almanna-þing「全体集会」（alþing）と造語上対応しているのは明らかである。ON. þing-völlr「民会の野」の語にも代表されるように、古時代の民会・集会は野外にて行なわれた（マン島の Tynwald とシェトランドの Tingwall を参照：Cleasby & Vigfusson, 738）。hólm-ganga「決闘」が水辺での神占であったように、民会での討議も、水辺にて goð「神々」の裁きを仰ぐことを意味していたとみなしうる。

3. 決闘の野: OE. wang

さて、イェーアト（南西スウェーデン）の勇士ベーオウルフは、グレンデルとその母、および竜と対決し、それぞれを討ち果たしているが、すでに詳論を加えたように、これら三つの決闘の場所はいずれも wong（または wang）の語で表記されている（水野 2001b, 111 - 3）。たとえば第三の敵対者である竜の住み処は wong と呼ばれ、海辺に位置している（2242；2409）。

1）　　その塚穴は“広野”（wong）に
　完璧にしつらえてあった。　　“海の波”（wæter-yð）が寄せるそばで、

岬に新しく造られていた。　　匠の技をこらして堅固だった。
(2241－43)

「広野」と「海の波」が緊密に連合されている。金杯を盗んだ者がベーオウルフたち一行のために、竜の住み処へ道案内を務めるときにも、そのめざす場所は wong「野」(2409) と呼ばれ、holm-wylm「海波の渦巻く処」(2411) の近くに、竜がひそむ「塚穴」があることが表現されている。ここに wong と holm が共起していることを見逃してはなるまい。それぞれ ON. vangr と hólmr の同系語である。旧稿で論及したように、wang の本来の概念は、「幸と富と健康に恵まれ、光あふれ緑なす、海のかなたの常世郷」であり、また「絶えず憧憬されるべき楽土であり、この世に生命を投げ返す、死と再生の広野」と定義しうる (拙稿 1984, 333-5)。ちなみに『ベーオウルフ』詩中では、複合語を含めた wang の 15 の用例のうち、8 例は明示的あるいは文脈上、「海辺の地；水辺の野」を意味し、5 例は太陽または黄金によって「輝きわたる野」の意味で用いられている。こうしてみると、竜の住み処としての wong も、「海の波」が打ち寄せる浜辺であり、古き「楽園」の観念を部分的にとどめていると言えるだろう。

また最近、OE. grund (ON. grunnr) の語義を分析し、古ゲルマン人が思い描いた「根の国」に関する議論を展開した。彼らの世界観に照らせば、「この世」の大地の grund と、海や湖沼の底なる「あの世」の grund は、「生命と豊饒あるいは至福の根源の地」として、まさに連続する「底なる根の領域」として把握されていたのである (水野 2001a, 116)。詳しくはその拙論に委ねたいが、竜の住み処を表わす用語 grund-wong「地底の原」(2588；2770) は、この意味できわめて注目に値する。莫大な宝物を占有する竜の住み処にも、wang「水の豊かな、光あふれる楽園」の基本イメージが認められることが分かった (水野 2002a, 52 - 4)。本来ならば楽土に満ちあふれる太陽の光のモチーフが、竜の塒の grund-wong「地底」を表現する文脈では、wæl-fyre「殺戮の炎」(2582) または leoma「(金色の旗からの) 発光」(2769) に変換させられているのだ。

同様にベーオウルフ対グレンデル、およびその母なる女怪との闘争の場所も wang「広野」で表記されている。たとえばグレンデルの母は、grund-wong「水底の広野」において、「その“大いなる水”(flod) の領域を５０年も統治していた」と記されている (1494－1500)。そして第一の怪物グレンデルとの戦闘は、Heorot (「鹿の館」の意) と称する、海辺から徒歩で行ける王館の「内部」にて行われた。ところが、ベーオウルフが故国に帰還し、ヒュイェラーク王の前でみずからの戦功を回想して語るときには、その闘争の場が「あの野原 (wang)」と呼びなされているのである。

２)　「主君ヒュイェーラークよ、　多くの人々にとって
かの大いなる“会戦”(gemeting) は　　もはや隠れもなきこととなっています、
あの“野原”(wang) にて　　私とグレンデルとの間で
いかに死闘の時が費やされたか、　あの場所にて奴は
常勝のシュルド族に対して　　数え切れぬ暴虐をはたらき
悲惨事はいつ果てるとも知れませんでした。そのすべてに私が報復したのです。」
(2000 - 05)

この言葉にみられるように、ベーオウルフは、デーン人にとっては「いつ果てるとも知れぬ」苦悩と悲惨からの救出者として出現したことになる。言い換えると、12年の長きにわたって怪物に占拠されていた「光あふれ水の豊かな聖地」または「豊沃なる野原」を、ベーオウルフはシュルド族のために奪回したのである（水野 2001b, 113)。

こうして勇者ベーオウルフの三種の決闘の場はいずれも **wang** の用語をもって表現されているのだが、繰り返すと、この語は ON.vangr「民会の野」と同系である。きわめて注目すべきことに、勇者と怪物グレンデルとの決闘が **micel gemeting**「大いなる会戦」(2001) と呼ばれているが、**gemeting** は同時に「集会」を意味しうる。要するにこれら三つの決闘は、勇者ベーオウルフが代表する「部族集団」（シュルド族またはイェーアト族）とそれぞれの魔物に表徴された「異族集団」の間の、水辺での「大集会」（上記の ON.almanna-vangr ; almanna-þing）の意義を有していたことになる。

4. 民会と激闘の野: þing と völlr

アイスランドの Þingvellir(「民会の野」の意)において、植民の指導者たちによって最初の立法集会が開催されたのは９３０年である。それから１２６２年まで夏ごとに全島集会がその地で開催された。当初は彼らの故地であるノルウェーのグラシング法（Gulaþingslög）を基礎としながらも、この間に大幅に条項が追加され修正が加えられた（Kristjánsson, 14)。その後も１７９８年まで、毎年６月に人々が参集し、約2週間を費やして、さまざまな係争や訴訟を討議し、また法を発布する、野外の国民議会としての機能を果たしてきた（Þorsteinsson, 3)。現代にいたるまでもシングヴェトリルは、たとえばアイスランド共和国の独立宣言（1944年6月17日）にも代表されるように、数々の最重要な事項を審議し、歴史的な決定を下す聖地であり続けたのである（Hjármarsson, 160)。シングヴェトリル湖（古名はオルヴス湖）に注ぐオクサル川が、Lögberg「法の岩」と称する裁きの場に沿って流れている（２０００年夏に当地を実見した)。その清流が、アイスランド各地より集った人々の飲料水になったであろうことは想像に難くない。しかしそれだけではなく、神々の審判を仰ぐ裁きの庭に水が不可欠であったと思う。

さて、エッダ詩において ON. völlr「野；平原」の用例を見ると、その１６例のすべてが「激闘；死；流血」のニュアンスをともなっている。「ハーヴィの語り」の２例のみは一見例外であるかにみえるが(Hávamál 11 & 49)、Valföðr「戦死者の父」と称された犠牲神オージンが旅する「野」とみなせば、これらも例外とはならない。ここでは「巫女の予言」の三つの用例と、関連する「グリームニルの語り」の１節を引用しておこう。

３）オージンは軍勢のなかへ　　（槍を）投げ放ち、射た。
　　それがこの世で　　最初の激戦となった。
　　アースの砦の　　木柵は打ち破られた、
　　闘争を予見しうるヴァンたちは　　“戦いの野”（völlr）を蹂躙しえた。
　　（「巫女の予言」24)

神秘的な女性グッルヴェイグの虐殺と蘇生（21節）に起因する、アース対ヴァンの両神族の「この世で最初の激戦」に関する記述である。fólk-víg「激戦」と víg-spár「闘争を予見しうる」の語句は、同じ víg「死闘」を介して緊密に結ばれ、さらには「戦場」としての völlr のイメージを喚起している。

4）わたしは見た、　　オージンの息子バルドルには、
血に染まりゆく神としての　　運命が定められてあることを。
“野”（völlr）にはひときわ高く、　　細いが、いと美しく、
宿り木が　　生い育っていた。　　（「巫女の予言」31）

冒頭にある「わたし」は、シャーマニスティックな忘我状態と詩的陶酔のなかで、バルドルの殺害を不可避の örlög「運命」として「幻視しえた」巫女をさしている。宿り木は、「ギュルヴィの幻惑」49章によれば、Valhöll「戦死者の宮殿」の西に生息しているという。ロキがこれを入手し、盲目の戦士ホズに手渡し、教唆された方向をめがけて後者がそれを「射かけた」とき、宿り木はバルドル必殺の harm-flaug「災いの投射武器」と化すとされる（「巫女の予言」32）。巫女によって、ここに blóðugr「血に染まりゆく」神と予見されたバルドルの殺害は、こうして実現するのだ。ヴァルホッルの近くに völl「野」が広がっているという描写はつぎの記述にも見える。

5）　聖別された扉の前に、　“野”（völlr）に荘厳にそびえ立つものは、
ヴァルグリンドと称されている。　その囲壁は古さびているが、
いかにして門扉が閉ざされてあるのか、　知る人は少ない。
（「グリームニルの語り」22）

Valgrind は「戦死者の門または囲壁」の意味で、ヴァルホッルの入り口に当たる。ちょうど冥府ヘルにも Helgrindr（複数）という名の囲壁がめぐらしてあるのと相似的である。冥府下降の旅をしたヘルモーズが、オージンの馬スレイプニルに拍車を入れると、馬は高々と跳躍し、その冥府の「門」（単数：grind）を飛び越えたという（Gylf 49）。そこへと至る前にヘルモーズは、「冥府の囲壁(Helgrindr)を取り巻く」ギョッル川(Gylf 4)を通過している。4）と5）の記述を統合すると、ヴァルホッルの周辺に、戦闘と死のイメージが濃厚な völl「野」が広がり、その一画にバルドルの死を招く宿り木が生い育っているのだが、近傍の地に流れる水のイメージがひそんでいるようである。外見は「いと美しき」（mjök fagr）宿り木が、「姿形のとても美しい」（svá fagr álitum）バルドルを殺す武器となるというのは実に皮肉めいている（水野 2002b, 216）。

6）そこへ闇なす竜が　　空を飛んでくる、
その蛇身はきらめき、　ニザフィョル（「月の丘」）の下方から昇りくる。
翼に死骸をのせて　　ニーズホッグなる竜は
“野”（völlr）の上を飛びゆく。

さて、かの女は沈みゆかん。　　（「巫女の予言」66）

ラグナロクいわゆる「神々の滅びゆく定め」の後の描写であるから、「野」は神々と魔の軍勢が死闘を繰り広げた戦場をさしている。「かの女」は、Valföðr「戦死者の父」なるオージンの神威をまとってfornspjöll「古言」を語ってきた巫女（1節）をさしているが、その語りを「かの女は沈みゆかん」という最後のフレーズをもって突如中断するのである。アースラ・ドロンケによれば、この言い回しは、詩的陶酔から覚醒した巫女が、おのれの現実世界に連れ戻されてゆくことを示唆しているとされる（Dronke, 61）。

「巫女の予言」の最終66節が先に引用した24節と相関をなすことは明らかである。いわば、ヴァンたちがvöllr「戦いの野」を蹂躙したときが、「この世で最初の“激戦”（fólk-víg）」であったことと対照的に、ニーズホッグという竜が死骸を翼にのせながらvöllr「野」の上を飛ぶときには、「この世で最後の激戦」としてのラグナロクが終結することを象徴的に物語っている（水野 2001b, 105）。

このように、víg「戦闘」とvöllr「野」の概念が緊密に連合された例はほかにも認められる。「スルトとあの優しき神々が戦闘（víg）を繰り広げる野（völlr）は何と呼ばれているか？」という巨人ヴァフスルーズニルの問いに対して、オージンは、その野原はVígríðrと呼ばれていると答え、「彼らのために戦場（völlr）として“割り当てられて”（vitaðr）いるその場所は、どの方向にも百ラスタの長さを有する」、と述べている（「ヴァフスルーズニルの歌」17 - 18）。スルトは、炎熱の領域ムスペッルの守護者だが、ラグナロクのとき至れば、炎の剣をもって神界に攻め寄せてくるとされる（Gylf 51）。最終的に神々を滅ぼし去る巨人族や「ムスペッルの子ら」の魔の軍勢が襲来する場所は、ヴィーグリーズのvöllrと呼ばれているが、Vígríðrそれ自体が「死闘の野原」を意味している（水野 2001b, 105-6）。

注目すべきことに、先述したOE.gemetingと同様に、ON.þingにも「民会；議会」のほかに、「会戦」という意味合いがあった。典型的な例をあげると、ラグナロクにおいて、魔の軍勢が押し寄せるとき、ヘイムダッル神がギャラルホルンを吹き鳴らし、「すべての神々」の覚醒をうながすというが、神々が宿敵を迎え撃つためにヴィーグリーズの野に集結するさまが、“**ok eiga þau þing saman**”「こうして彼らはともにþingを開くのだ」と記され、「会戦の火蓋を切る」ことを表現している（Gylf 51）。ここでは**saman**は「相ともに」を意味する副詞だが、**sam(an)-dráttr**や**saman-samnaðr**が「ともに集う会合」を意味するのに対して、**saman-eiga**や**sam-gangr**は「相対峙する闘争；決闘」を意味している。たとえば、炎の剣をふるうスルトとこれを迎え撃つフレイ神の「決闘」が**sam-gangr**で表現されている（Gylf 51）。このように、「野」にて行なわれる「集会」と「決闘」が表裏一体をなすものとして捉えられていたのだ。

近著でも述べたように、バルドルは**dómr**「裁き」の座に臨在する神であったが（Gylf 22）、神々が参集するþingの場で殺されている（Gylf　49）。バルドルはmannhringr「輪形に取り囲んだ神々」の「真ん中」で、いわば「神々の犠牲者」として葬り去られていると解した（拙著 2002b, 286 - 305）。ちなみに神々は、世界樹ユッグドラシルの根の下にある**Urðar brunnr**「ウルズ（運命）の泉」という「きわめて“神聖なる”（**heilagr**）泉」にお

いて、「毎日、裁きの席をもうける」と記され、その場所は「神々の“聖域”(helgistaðr)」と称されている(Gylf 15)。「聖なる水辺での会議」という宗教的な理念がここにも打ち出されている。

5. ゴジとゴズ: 民会の首長と神

さて、先述したシングヴェトリルのAlþingi「全島集会」を取り仕切っていたのは、出身地方を代表する首長であり、goðiの名で呼ばれていた。そもそも全島集会の設立(930年)の発起人となったゴジたちは、自分たちの父祖が9世紀初頭のノルウェーの豪族ビョルン・ブナに遡る、とみなす「一大親族の集団」に属していたと推定されている(Byock, 93)。当初36名を数えたゴジが、965年には39名、1005年には48名に増加している(Haywood, 22)。ゴジは、特定の親族集団の代表者と、各地方の有力者を中心に選出されたと考えられているが(Byock, 94)、ゴジ職に携わる者の数が後代に増加したことからすれば、その選出は、次第に後者の方式に比重が移行していったのだろう。しかし、goðiという名はgoð「神」(単複同形)に由来し、400年頃のノルウェーのルーン文字にもその名が認められる(Byock, 94)。hofgoði「神殿祭司」という語にも表徴されているように、ゴジという職分や権限(goðorð)は、ある特定の神に仕え、その託宣を伝える「神官」から発したのではないかと推定される。集会においては、ゴジが地域民の利害を代表する者として発言権を有するが、その主張を支持する補佐役はシングメン(複数:þingmenn)と呼ばれていた。J.バイヨックは近著において、スラーンドヘイム(現トロンヘイム)にてhofgoði「神殿祭司」の任にあった<老>ソールハッドなる人物をあげ(『植民の書』S297, H258)、初期アイスランドへの植民者たちの間で「神殿祭司」の職分をとくに設けない場合には、各地の首長が「地方集会の場を清祓し、公的な供犠を執行する責務を負っていたように思える」、と言っている。供犠はしばしば儀礼的な宴会をともなうが、首長がホストとなる祝宴において、ある農民代表が賄い役を務める。バイヨックの推定によれば、両者のこうした不可分な関係が、集会におけるゴジとシングメンの相互扶助の関係を生んだとされる(Byock, 94)。

「聖なるウルズの泉」での「神聖なる会議(þing)」の「中央部」で殺されたバルドルの神話的モチーフを重視すれば、goðiたち(複数goðar)は元来、水辺での犠牲祭を執行する中心的な役割りを果たしていたと言えよう。その意味で、アース神族の仲間入りをさせられたニョルズとフレイが、blót-goði「供犠の祭司」に任ぜられたという記録はすこぶる重要である(「ユングリンガ・サガ」4章)。これら父子神は「平和と豊饒」を司る神であった(水野2000b, 188)。年に一度、多数の人々が寄り集う民会の場で、夏の訪れを祝す一大饗宴がはられたに違いない。犠牲獣の肉を共食し、酒杯を交わして、「親族・同族」としての帰属意識を確認し、その結束を固めるところにその饗宴の存在意義があったと思う。少なくとも、草創期の全島集会においては、ビョルン・ブナを共通の父祖と仰ぐゴジたちを中心に、同じ親族としての不抜の精神がみなぎっていたはずである。別の言い方をすれば、さまざまな係争の解決と不和対立の解消を本来の目的とする「集会」そのものが、広義での同族の平和と繁栄を志向するものであった。ちなみに『ラクス川谷の住民のサガ』(4-7章)に描かれた<深慮の>ウ

ンは、「的確な判断と思慮をもって土地を分け与える女王」(Kristjánsson, 276) または女神のような人物として人々に敬愛されたのだが、彼女はビョルン・ブナの孫であった。その名前 Unnr が uðr「波」を意味し、vinr「友愛の士」に関連があるオージンの別名ともなりえたというのも単なる偶然ではあるまい (de Vries 1962, 635)。ちなみに「土地と動産を恵与する神」として崇められたのは、「豊饒と平和」を司るフレイの父ニョルズであった。神々への犠牲と饗宴をともなう初期の民会において、人々は、その聖なる野を基点として、まさに周辺に広がりゆく波のように、「豊饒と平和」が地平にあふれゆくことを念願していたのだろう。

決闘の神ウッルが「Sif の息子」であったのはいかにも示唆的である。Sif が「同族」または「血族」の基本概念と結びついていたが、その夫神ソールについて、「神々と人間たちのなかで最も強い」と称えられ (Gylf 21)、「ソールは“力”(ár) をふるい、イッグ (オージンの異名) の従者たちとアースガルズを守護した」と歌われている (Skm 11)。ここでの ár は「豊饒」を意味し両義的である。アイスランドの農民に最も崇拝されていたのは、オージンではなく、「豊饒神」とみなされたソールであった (Turville-Petre, 84 - 95)。ソールが megin-gjarðar「力の帯」を身にまとうと、その ás-megin「神の力」が倍増すると伝えられている (Gylf 21)。かれの母は Jörð「大地」の名で呼ばれていた。ソールによって外化される megin-gjarðar は、内在する jarðar-megin「大地の豊饒力」の発現とみなされていたにちがいない。さらに haddr Sifjar「シヴの髪」は「黄金」を意味するケニングだったが (Skm 43)、その「黄金の髪」は豊かに実る麦を象徴していたのだろう (水野 1987, 115-21)。したがって、人間界の守護神ソールが巨人との「決闘」において発揮する「神力」は「大地豊饒力」と不可分であり (水野 2001b, 116－17)、同時に妻神 Sif の名にひそむ「同族」意識 (Go. sibja; OE. sib) と分ちがたく結びついている。このような相補的な観念連合が古ゲルマンのゲマインシャフトを構築する理念となっていたように思われる。

6. 事例(1):神殿祭司と民会のゴジ

『エイル住民のサガ』に、大供犠祭を執行して「自分の“親愛なる友”(ástvinr)」と称するソール神の託宣を得て、アイスランドに移住を決意した人物の話が載っている。モスト島 (現 Moster 島：ハーロング・フィヨルドの入り口) で大農場を営む「偉大な“首長”(hofgoði)」で、フロールヴという名であったが、ソールの「神殿」(hof) を管理し、長い髭をたくわえていたことから<モストの髭男>Þórólfr の異名で呼ばれていた。彼は神殿を解体し、その木材の大部分ばかりか、台座の下の土をも船に積み込み、一族郎党を率いてアイスランドをめざしたという (3 - 4章)。さて、船がアイスランドの南西端のレイキャネスを巡行し西進した後に、彼は神殿の柱を海に投げ入れた。ソーロールヴは、ソールの柱が漂着したところを定住の地とすることをかねてより口約していたのだ。こうしてスネーフェル岬を西に巡行し、やがて入り込んだフィヨルドをブレイザフィヨルドと名づけ、後に Hofsvágr (「神殿の入り江」の意) と命名する入り江に船を着けた。周囲の土地を検分し、やがて、その入り江の北端に、ソールの神像や柱が流れ着いているのを見つけたので、以来そこはソールスネス (「ソールの岬」) と呼ばれている。こうしてソーロールヴは同行してきた人々の定住地をさだ

め、Hofsvágr に大きな農場を作り、これを Hofsstaðir と名づけ、またそこに大神殿を造営したという。その神殿の内奥部にある部屋の中央に、「祭壇に似た台座」があり、重さ 20 オンスの腕輪がその上に置いてあるとされ、続いて次のように記されている。

> 人々はその腕輪にかけて、ありとある誓約を立てねばならなかった。すべての“集会”(mann-fundir) に際して、“神殿祭司”(hofgoði) は手にその腕輪を着けてゆかねばならなかった。その台座の上に“供犠の容器”(hlautbolli) が置かれてあり、その中には“供犠の枝”(hlautteinn) —潅水式の刷毛のようなものだが—があった。それは容器から血を振り撒くためのものであった。この血は、供犠の血と呼ばれたのだが、“特定の神々に”(goðunum) 捧げられる生け贄の血であった。・・・(中略)・・・すべての農民たちはその神殿に税を払わねばならず、彼らは“神殿ゴジ”(hofgoði) が民会に旅立つときには随行しなければならなかった。それは、ちょうどシングメン (þingmenn) が彼らの“首長”(höfðingi) を補佐するのとよく似ている (『エイル住民のサガ』 4 章)。

ソーロールヴはその名の通り、きわめて敬虔なソール信仰者として描かれている。この記録によれば、ホヴゴジ (hofgoði) という同じ職分名について、基本的に三通りの役割が区別できるようである。まず最初に、(1) フロールヴがノルウェーのモスト島で「大農場」を営んでいたとき、ホヴゴジは一族集団を従えた「豪族」の意味を有している。彼はこの頃<モストの髭男>Þórólfr の異名で呼ばれるほどに、ソールに対する熱心な信仰者であった。hofgoði はここでは文字通り「ソールの神殿を管理する祭司」を意味している。(2) アイスランドに移住した後も、彼のソール崇拝の熱意はあまり変わらないように見えるが、定住地で造営した神殿の内部の祭壇で犠牲祭を執り行うとき、hofgoði は本来の性格を変え、ソールひとりを崇める「神殿祭司」から、複数の「特定の神々」に奉仕する「犠牲執行者」の役に成り変っているように思える。(3) 通常は神殿の台座に腕輪が安置されてあるのだが、集会に参加するときになれば、その都度ホヴゴジはその腕輪を着けて旅立つ。この場合、管理してきた神殿を離れるのであるから、「祭司」としての役柄を一時的に放棄したことを意味している。したがって、(1) や (2) の特性と区別するために「神殿ゴジ」と訳出した。その旅には農民たちが不可欠の要員として付き随ったとされる。

さて、(4) こうして民会の場に到着した hofgoði は、シングメンと連携しながら、地域農民や親族の利害を代表して弁論・討論を展開するのだが、そのとき彼は「神殿ゴジ」としての旅を経過することによって、「神殿祭司」との役柄からほぼ完全に脱却し、神々の英知を身にまとったゴジ (goði) に変貌をとげるとみなしうる。

7. 事例(2):民会と決闘と犠牲

『エギルのサガ』65 章に、エギル・スカッラグリームソンと<ちびの>アトリの決闘の記述が見える。ホルザランド地方へ航行の途中で、エギルは仲間とともにフェンフリング島(現ベルゲン北西の Askø)の Askr に立ち寄り、<ちびの>アトリに対して、「自分と妻アースゲルズが正当に所有すべき財産 (土地と動産)」の返還を要求した。

アトリにしてみれば、それは自分の兄ベルグ・オヌンドがエイリーク王より授与された財産であって、しかもエギルによって二人の兄弟が殺されているという恨みがあった。そこで両者相譲らず、グラシングに出席して法の裁きを受けよう、ということになった。そこでエギルは仲間とともに北のソグンへ向かい、グラシング開催のときを待った。

さて、民会の場で、エギルとアトリは裁定を下すべき人々の前で、それぞれ本件について陳述し弁舌をふるった。エギルは財産返還を申し立てたが、アトリは12名の宣誓証人を立てて自己弁護をはかった。そこでエギルはアトリの方へ進み出て、財産の返還なくしてアトリのための宣誓を受諾することを拒否し、こう言い放っている。

「私は君に別の“法”(lög) を提示したい、つまり、われら二人がこの“民会”(þing) の場で“決闘”(hólmr) して、その勝者が財産を受け取るのだ」と。

この発言の中に典型的に認められるように、「民会」での激論が、状況によっては、しばしば「決闘」に早変わりしたようである。しかも、その直後に次のような重大な一文が記されている。

> エギルが述べたことは、これまた“法”(lög) であり、自分の弁護をしたり、あるいは告訴すべきときに、そのいずれ側であろうとも、相手に“決闘”(hólmganga) を挑むのは正当である、という“古来の慣行”(forn siðvenja)があった。

このように告訴人か被告人であるかを問わず、民会における自己の主張をまっとうするために、武闘的な手段に訴えることは、彼らの「法」と「慣行」に照らして réttr「正当である」とみなされていたのである。

ともかくこうして両者の決闘となるのだが、その場所に引き出された「大きくて老いた牡牛」が blót-nautr「犠牲の贈物」と呼ばれたという。決闘では最終的にエギルが勝利し、その後ただちに供犠の牡牛を屠殺している。こうしてエギルは、かねてより主張していた「すべての土地」を所有するところとなった、と記されている。旧稿で触れたように、「犠牲の贈物」と称された牡牛は、勝利を授与し「正義と誓約」を司る神テュールに捧げられたと推定できる (水野 1981)。

先述したように、hólm-ganga は字義的に「川中島または小島へ決闘に出向くこと」を意味し、決闘は、まさしく水辺にて、競合する当事者の「主張」について、神々の dómr「審判」を仰ぐところにその原義があった。グラシングという名の民会の場所は、ソグネ・フィヨルドへの入口の海辺に位置している。したがってエギル・スカッラグリームソンにとって、「グラシングの法」(Gulaþingslög) に照らして、dœma「裁定を下す」べき人々の前で自己主張の弁論を繰り広げることと、水辺で敵手と決闘することはほとんど等価であったといえる。民会における論争と決闘の当事者たちは、いずれもある特定の親族の代表者として、自己の主張や権利の「正当性」をめぐって、激論または激闘のデモンストレーションを行なっていた。繰り返すと、民会と決闘はいずれも「水辺での神占」の意義を有していたことになる。

8. 事例(3):館の中での決闘

水辺での hólmr「決闘」と異なり、ソール対巨人ゲイルロズの「対戦」は leikr の名で呼ばれ、ゲイルロズの「館（höll）の中」で行なわれている（Skm 26)。この場合ソールは、ロキのある失策が原因で、かれの戦闘必需品としてのミョルニル槌、力の帯、および鉄の手袋を持たずに遠征させられている。しかしその途上で、女巨人グリーズのところに立ち寄り、代用となる三種の武具（彼女の力帯、鉄製の手袋、および棍棒）を借り受けている。そして、「あらゆる川のなかでも最大の」ヴィムル川（Vimur「奔流」の意）をソールが徒渉したときのこと、急に増水してきたので、ふと上流付近を見やると、ゲイルロズの娘ギャールプが用を足していた。そこでソールは、川底から大石を取りあげて、彼女めがけて投げつけ、次のように言葉を発したという。「水口から、ふたがねばなるまいて」と。

女巨人の名前 Gjálp は、OE. gielp「自慢；虚栄；見せびらかし」に関連がある。したがって、ここで「水口」と訳した原語 óss は、「川水の流出口」あるいは「水源」という字義的な意味のほかに、「小水の出口としての女陰」を示唆している。思うに、この神話は、大物主の神に見初められたセヤダタラヒメが「大便まる」ときに、「溝より流れ下れる」丹塗り矢（火雷神の象徴）によって女陰（ホト）を刺されたという日本神話（神武記）と構造的に一致している。

ともかくもソールは、この時に溺れかかるところを岸辺のナナカマドにしがみついて助かったという。ロキがソールの遠征に同行しているものの、さしたる働きをしていない。しかし、火雷神ソールが ás-megin「神力」を発揮する上で不可欠な logi「火」の化身として、Loki がその傍に控えているのだろう。

こうしてソールは巨人ゲイルロズの屋敷にたどり着いたが、geita-hús「山羊小屋」が宿泊所にあてがわれたという。ソールはそこにひそんでいたゲイルロズの二人の娘を懲らしめた。さて、いよいよゲイルロズは、ソールと leikr「対戦」しようとして自分の「館」の中へと呼び寄せたというのだ。「その館内の隅々に、大いなる火が燃えさかっていた」と記されている。「最大の川」というヴィムルの奔流と、「大いなる火」の描写はまさに好対照をなしている。ここで用いられた leikr は多義的で、「遊び；スポーツ；試合」といった意味がある。その戦闘方法はいかにも奇妙であり、ゲイルロズが赤熱した鉄塊を投げつけ、それを鉄の手袋で受け止めたソールが相手に投げ返すというものであった。ソールが投じた鉄塊は、館の支柱とゲイルロズの体を突き抜け、さらには壁を突き破って、外の地面にめりこんだという（Skm 26)。「燃えさかる火炎」や「赤熱した鉄塊」のモチーフを注視すれば、この巨人が鍛冶師の風貌を秘めており、ミョルニル槌を所持する火雷神ソールと似たもの同志であるとみなしうる。「踏鞴」との関連を示唆するセヤダタラヒメの神話との対応関係がより緊密になってくる。

全体の粗筋を追ってみると、両者の「激闘」があった屋敷は、ヴィムルの奔流の近隣に位置づけられるだろう。先述したように Leikanger や Leikong などのノルウェー地名は、ON. leikvangir「(家畜の遊ぶ）放牧地」に由来し、「水辺」からやや離れた所に位置している。この視点をもってすれば、ソールがヴィムル川を渡った後に、まず最初に山羊小屋に招じ入れられたという話の脈絡は、充分に納得がゆく。山羊小屋の周辺には、vangr「牧草地」が広がっていると想像できよう。Ökuþórr「(山羊の引く）車を操るソール」という異名にみられるように、山羊はソールの神獣であった。

9. 遊び・詩歌・戦闘および犠牲の祭祀

ON. leikr は OE. lac「犠牲; 捧げ物; 戦利品; 遊び」と同系であるが、とくに後者に「犠牲」の意味があることに注目したい。OE. beadu-lac; heaðo-lac「戦いの遊び」や sweorda-gelac「剣の遊び」は「戦闘」を意味する複合語であった。ちなみに動詞 OE. lacan と ON. leika は「ゲームをする；遊ぶ」のほかに「武器を（激しく）振る；勇武の業を示す」を共通の意味として有している。遊びと戦闘行為がある共通の概念を仲介としながら、根底で結びついていたと思われる。ON. leikr と OE. lac の関連語彙について、「波の上で揺られる舟の動き、空を上昇したり下降したりする鳥の飛翔、揺らめく炎の動きなど」を表し、そのような活動の概念が「ゲーム、遊戯、演奏、舞踏など」の概念に適用されていった、と説かれている(Bosworth & Toller, 603)。

一方、J・グリムの推定によれば、leikr その他の同系語は「犠牲にともなう舞踏や Spiel」が原義であったが、後に「捧げられる贈物（供犠物）それ自体」を意味するにいたったとされる(Grimm, 32)。OHG. leih が「旋律；歌」の意で用いられ、Go. laiks が Gr. choros「踊り」の訳語（「ルカ伝」15・25）に当てられていたことを重視した説だろう。ここでグリムが提示した Spiel は、前後の脈絡からみて「演奏と歌」をさしているようだが、Spiel それ自体が「試合；競技；ゲーム；遊び；演劇」を含む広い概念である。はたしてグリムが思い描いた犠牲祭の原風景のなかに、とくに「試合や競技」あるいは「詩歌」の要素が含まれていたかが定かではない。

OE. Guðlac (ON. Gunnleikr)、OE. Hygelac (ON. Hugleikr)などの人名に用いられたことから推せば、lac は身体の動きに加えて、ある心的または霊的な状態を表わしえたと思う。ただし F. ロビンソンは、lac を「軽薄」または「心の動揺; 狼狽」と解し、ON. hug-leikin を「心の混乱;動揺」の意味に解釈しているが (Robinson, 217)、それが原義であったとは考えられない。“hug leikin(n)”の用例（「巫女の予言」22）は、seiðr という呪術を駆使して「人心（hugr）をたぶらかす」ことを意味しているが、その直後に、「淫らな女たち」がその呪術に熱狂し、錯乱状態に陥ることが記されている。ちなみに Go. laikan は「跳び、はね、うごめく」を意味し、“聖霊に満たされた”母の胎内にて「躍動する」いのちを表わす用例があり（「ルカ伝」1・41/44）、OE. lac も本来は「霊的に昂揚した憑依状態」をさしていたと考えられる。

そもそも戦闘行為には、「オージンに戦士を犠牲に捧げる」という儀礼的な側面があったという指摘がなされている(Smyth, 270)。Guðlac や Hadulac(<heaðo-lac)などの人名は、したがって「戦闘に心身を捧げ、またオージンの神霊（óðr）が憑依するもの」を意味している（水野 1999, 25-8)。戦闘と犠牲はまさに表裏一体であった。たとえば<侯の詩人>ソールレイヴによると、ノルウェーのハーコン大王(995 年没)は異教の崇拝者で、9 人の敵将をオージンに捧げたと伝えている（Skj. B, I, 132）。またハラルド美髪王に仕えた詩人<わたり鴉の>ソールビョルンが、砂地で討たれた者は Frigg の夫(片目のオージン)のところへ送られる、と歌っている（Skj. B, I, 24）。

ここで、「水辺の館」の中でのソール対ゲイルロズの「決闘」が leikr と呼ばれてい

たことが改めて想起されてくる。多分に後代の変容をきたした伝承であろうが、「赤熱した鉄塊」を投げ合うという leikr の仕方はいかにも遊戯的である。神々と巨人という異族を代表する両者が、leikr「一種のゲームにも似た闘技」いわば模擬戦を演じて見せる状況は、犠牲祭を執行する人々の間にも存在したと考えられる。遊び、闘争、競技、そして祭祀の相互連関については、すでに J・ホイジンハがかの名著のなかで論及している (Huizinga, 101-18)。この意味で、ソールの投じた鉄塊が、館の支柱とゲイルロズの体を突き抜け、さらには壁を突き破って「外のあの大地」(útan í jörðina) にめりこんだという記述は無視できない。この表現でもって、両者の決闘の語りが忽然と終わり、詩人エイリーヴ・グズルーナルソンがこの「故事」にちなみ、「ソールへの讃歌」(Þórsdrápa) を創作した、と付言されている (Skj. B, I,139-44 参照)。Geirröðr(「槍の守り」の意)と称された巨人は、鍛冶師の風貌を秘め、人間界の守護神ソールの分身のごとき特性を有するが、あたかも火雷神の代理として「大地への犠牲」(血祭り：blót) とされたかに見える。ここでは saga「故事」に基づく詩作となっているが、leikr の原義に重きをおけば、元来は犠牲の場において「決闘の勝者」を称賛する即興詩であったと考えられる。同じ詩人エイリーヴは、1000 年頃にキリストを鑽仰する詩を作っているが、残存するその断片によれば、キリストが「南のウルズ (運命) の泉の近く」に位置する「山の神々の土地」に座している、と歌い上げている (Kristjánsson,112)。この詩歌ではキリストが「ローマの力強き王」に見立てられているものの、主キリストが「運命の泉」に降臨するというのは、「水辺での裁き」という異教の図式に則った語りとなるだろう。なぜならば、ウルズの泉は元来、オージンを筆頭とする神々が「毎日、会議を開く聖域」であったから (Gylf 15)。

『ニャールのサガ』102 章によれば、異教を信ずる女詩人ステイヌンがサングブランド神父 (997－99 年にアイスランド布教) に向かって、「ソールはキリストに“決闘”を申し込んだが、キリストはソールと闘おうとしなかった」という言葉を投げかけたという。キリスト教の布教に際して、根強いソール崇拝が障壁として立ちはだかったことを示す一節であるが (水野 2000a, 106)、ここでの「決闘」の原語はやはり「水辺の地」を明示する hólmr である (*Brennu-Njáls saga*, 265)。

ノルウェーには、先述した ON. Leikvangr (または-vangir) のほかに Leikvin や Leikvöllr に由来する地名が現存している (現 Løken, Lekvoll)。いずれも教会に近接しているが、古くは異教の崇拝地または民会の開催地であったと考えられている。T. グンネルは、野外での「大掛かりな、組織的な leikr(種々の闘技やゲーム)がきわめて古き時代より、社会生活の中心をなしていた」と推察している (Gunnell,30-31)。そして古アイスランドの資料に基づき、leikr の意味内容には、剣の演技、闘技、球戯 (knattleikr; torfleikr)、水泳、短剣投げの芸当ばかりか、音楽、子供たちのゲーム、チェスゲーム、恋の戯れ、手品、そして seiðr と呼ばれた呪術も含まれていた、と言っている (Gunnell, 26-7)。しばしば予言的な詩歌や呪文をともなうセイズは北方のラップ人より修得した一種のシャーマニズムであるという指摘がなされているが (Strömbäck, 121)、グンネルは「カーリ (フルートの息子で 12 歳) が leikr (所定の儀式と呪歌をふくむ魔術) をかけられて、眠らされた」話 (『ラクス谷の住民のサガ』37 章：原文 p. 106) などの用例をあげて、leikr にひそむ儀礼的・魔術的な側面を重

視している（Gunnell, 27-28）。

さて、もはや詳論する余白はないが、夜の間に「屋敷の外」から leikr「魔術」をかけられたカーリは、「外をのぞき、魔術（seiðr）の現場に行った途端に急死した」とされる。leikr はまさに生死にかかわる呪術であったことになるが、この事件が起きたのは「ある夏の民会（þing）」が終って間もない頃であった。しかも、カーリの父フルートがエルドグリームという男を殺したことで、かえって甥の Þorleikr を激怒させて恨みをかい、そのことが原因で、彼の依頼を受けた者たちによって、フルートの屋敷の外で「大掛かりな魔術（seið）」すなわち leikr がかけられたのであった（p. 105-06）。そもそもエルドグリームはソルレイクの「放牧中」（leikr の基本概念）の馬を盗んだために、フルートによって殺されたのだった。また Þorleikr という名は「ソールの闘技」の意味に解しうる。そして付言すると、フルートの農地（Hrútsstaðir）は、フヴァムスフィヨルドの近傍に位置していた。「夏の民会」の時節に「水辺の地」にて「犠牲者」が出るという語りの基本構造は、「決闘と民会の野」という古来の図式に則っていると言えよう。

全島集会の聖地は古くは単数形 Þingvöllur だったが、ソールの領有地 Þrúðvangar「力の野」と同じく、複数形で Þingvellir と呼ばれて今日にいたっている。この事は、民会の野の此処かしこの区域に親族が集い、広義での leikr に打ち興ずる人々の姿が見受けられたことを示唆しているのではないか。hólm-stefna「決闘の場」で行なわれたソール対フルングニルとの einvígi「決闘」が、その名の通り真剣味を帯びているのに対して、ゲイルロズとの leikr「闘技」は遊戯的な要素を含んでいる。しかし、いずれもその対戦相手は「神力」をふるうソールによって滅ぼされている。多岐にわたる意味内容を含む leikr の根本概念として、グリムに倣って、ある種の「犠牲の祭祀」を仮定することはやはり必須となるだろう。おそらく初期の段階から、犠牲祭にともなう「予言・祈願・予祝あるいは勝利の歌」も leikr の概念に包摂されていたにちがいない。しかし、民会における祭祀的・遊戯的・儀礼的な要素が次第に捨象され、または衰退していったときに、たとえば平和を寿ぐ「予祝の歌」としての leikr が、敵対者による「呪詛（かしり）の歌」に転じるのは比較的容易となっただろう。

さて、Freys leikr「フレイの遊び」は「戦闘」を意味するケニングであった（「ハラルド美髪王のサガ」15 章）。本稿の序で触れたように、フレイの父神ニョルズの原姿を部分的に反映したネルトゥスは、時を定めて「水辺」に参着し、「平和と豊饒」を招き寄せる terra mater「大地母神」として崇められていた。記録者タキトゥスは、ニョルズとその娘フレイヤの特性を誤認したのではあるまいか？その祭日のときには、人々の間で「平和と安息」が強く意識されたというのだが、民会の場においても、同族の平和と豊饒という同じ理念が存在していたにちがいない。ただし、先述したように、その聖なる野原の一画は、状況によっては古法にしたがい「決闘」の場に成り変りえた。したがって、Fólkvangar「民（軍勢）の野」（複数）を領有していたとされるフレイヤこそ、このように両義的な聖域に示現するにふさわしい女神だったと思う。そして決闘の神ウッルを継子とするソールは、Þrúðvangar「力の領野」に比定しうる民会の場を清祓し、これを守護する神とみなされていたに相違あるまい。

注：
作品の略記は慣例に従った。
Gylf : Gylfaginning　　Skm: Skáldskaparmál　　Skj: Skjaldediktning

REFERENCES

Aðalbjarnarson, Bjarni. ed (1961) Heimskringla, I. Íslenzk Fornrit, XXVI.

Benediktsson, Jakob, ed. (1986) Íslendingabók, Landnámabók. Íslenzk Fornrit, I.

Byock, Jesse (2001) Viking Age Iceland. Penguin Books.

Cleasby, R. & Gudbrand Vigfusson, eds. (1874) An Icelandic-English Dictionary. 2nd ed. Rpt. 1975, Clarendon P.

Dronke, Ursula, ed. (1997) The Poetic Edda, vol. II. Mythological Poems. Clarendon P.

Elgqvist, Eric (1952) Studier rörande Njordkultens spridning bland de Nordiska folken. Olins Antikvariat.

Elgqvist, Eric (1955) *Ullvi och Ullinshov*. Olins Antikvariat.

Faulkes, Anthony, ed. (1982) *Snorri Sturlson: Edda: Prologue and Gylfaginning*. Clarendon P.

Feist, Sigmund (1939) *Vergleichendes Wörterbuch der Gotischen Sprache*. E. J. Brill.

Grimm, Jakob (1854) *Deutsche Mythologie*. Bd. I, Die dritte Auflage, 1981, Ullstein Materialien.

Gunnell, Terry (1995) *The Origins of Drama in Scandinavia*. D.S.Brewer.

Haugen, Einar (1965) *Norwegian English Dictionary*. U of Wisconsin P.

Haywood, John (2000) *Encyclopaedia of the Viking Age*. Thames & Huson.

Huizinga, Johan (1938) *Homo Ludens: Vom Ursprung der Kultur im Spiel*. 1987, Rowohlts Enzyklopädie.

Hjálmnarsson, Jón R. (1993) *History of Iceland: From the Settlement to the Present Day*. Iceland Review.

Kristjánsson, Jónas (1988) *Eddas and Sagas*. Hið íslenska bókmenntafélag.

Jónsson, Finnur (1973) *Den Norsk-Islandske Skjaldediktning*. B, I, Rosenkilde og Bagger.

Jónsson, Guðni, ed. (1954) *Eddukvæði*. I & II, rpt. 1976, Íslendingasagnaútgáfan.

---(1954)*Edda Snorra Sturlusonar*. Íslendingasagnaútgáfan.

Kellogg, Robert (1988) *A Concordane to Eddic Poetry*. Colleagues P.

水野知昭(1981)「ゲルマンの宇宙創成論における月神崇拝」『日本大学工学部紀要』分類B, 22, 95-110.

---(1984)「古ゲルマンの楽園の原風景」『文化』(東北大学文学会)47, 3・4号, 328-50.

---(1987)「旅する客神ロキの神話—その(2)—」『日本大学工学部紀要』分類B, 28, 109-28.

---(1996)"Loki as a Terrible Stranger and a Sacred Visitor."『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>(信州大学人文学部)30, 69-90.

---(1998a)「来訪神ヘイムダッルと王権の成立」『説話・伝承学』6, 46-60.

---(1998b)「古北欧の「流され王」伝説」The Round Table（慶応義塾大学：高宮研究室）13, 135-46.
---(1999)"Othin who Presides over the Raging Army."*Iris* (U of Grenoble III)18, 19-36.
---(2000a)「北欧教会建立伝説の成立背景」『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>34, 89－114.
---(2000b)「海原を渡り来るおさな君一古北欧のマレビト一」篠田知和基(編)『古今東西のおさな神』(名古屋大学文学研究科)183-90.
---(2001a)「古北欧の「中つ国」と「根の国」」『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>35, 93-119.
---(2001b)「異人による聖戦としての竜蛇退治一力の勇者ベーオウルフとソールを中心に一」篠田知和基(編)『鬼と Demons』(名古屋大学文学研究科)103－19.
---(2002a)"The Conquest of a Dragon by the Stranger in Holy Combat."『人文科学論集』<文化コミュニケーション学科編>36, 39-66.
---(2002b)『生と死の北欧神話』(松柏社)
Nordal, Sigurður, ed. (1933) *Egils saga Skalla-Grímssonar*. Íslenzk Fornrit, II.
Robinson, Fred C. (1993) "The Significance of Names in Old English Literature." In: *The Tomb of Beowulf and other Essays on Old English*. Blackwell.
Sandnes, Jørn & Ola Stemshaug (1976). *Norsk Stadnamnleksikon*. Det Norske Samlaget.
Schröder, Franz R.(1960) "Nerthus und die Nuithones." *Die Sprache* 6, Bd. 2, 135-47.
Smyth, Alfred P. (1977) *Scandinavian Kings in the British Isles 850-880*. Oxford UP.
Streitberg, Wilhelm (1908) Die Gotische Bibel. Sechste, unveränderte Auflage, 1971, Carl Winter.
Strömbäck, Dag (1935) *Sejd: Textstudier i nordisk religionshistoria*. Nordiska texter och undersökningar 5, Hugo Gebers Förlag.
Sveinsson, Einar Ól. ed. (1934) *Laxdœla saga*. Íslenzk Fornrit, V.
---ed. (1954) *Brennu-Njáls saga*. Íslenzk Fornrit, XII.
Sveinsson, Einar Ól. & Matthías Þórðarson, eds. (1935) *Eyrbyggja saga*. Íslenzk Fornrit, IV.
Turville-Petre, E. O. G. (1964) *Myth and Religion of the North*. Greenwood P.
Þorsteinsson, Björn (1986) *Thingvellir*. Örn og Örlygur.
De Vries, Jan (1954) "Über das Verhältnis von Óðr und Óðinn." *Zeitschrift für deutsche Philologie*. 73, 337-53.
---(1957) *Altgermanische Religionsgeschichte*. rpt. 1970, Walter de Gruyter.
---(1962) *Altnordisches Etymologisches Wörterbuch*. E.J. Brill.

（信州大学人文学部　教授）